

Richard と Mrs. Mount

岩 崎 和 子

“The Ordeal of Richard Feverel”において、自然、芸術、人生、愛等々、いかなる問題をとり上げようとも、究極においては、一切の小道は、Meredith という偉大な人間の内面につらなっていく。一切が、Meredith が、生きた時代の内面と、彼のたどった人生へと還元されてしまうのである。

Meredith の描く女性とは、非常に面白い。女性の描き方——女性の創造において、彼の性格の二面（一面はロマンチストとしての彼、他の一面は、一切の装飾を見通してしまう鋭い皮肉屋としての彼）が、別個に現われるのだ。それ故、或る女性とは徹頭徹尾、純情で、美しいイメージを持つのであり、又他の或る女性とは、非常に現実的な（practical な）——人間的な——イメージを持つのである。前者のタイプは、最もありふれた型の“女性の理想像”であり、特に男性の筆から生まれた“女として、望ましき姿”なのである。Meredith の時代においては、悲劇のヒロインは、まだこのタイプの女性に限られており、これ以外の女性では、悲劇になり得なかったらしい。“Richard Feverel”の Lucy や Clare も、この例にもれない。Lucy の甘さ、美しさは、非常に巧みに描き出されてはいるけれど、彼女には、決め手となる個性がない。読者の心に食い入ってくる強烈さがない。いいかえれば、人間味がないということなのかもしれない。Meredith の筆は、Lucy を描く時、平凡で精彩がなくなるが、Mrs. Berry や Mrs. Mount を描く時には、突然、生々と活気をおびてくる。何らかの型で“自己”というものを持った女性を描く時、彼の筆は輝きだすのだ。教養はなくても、Mrs. Berry は自分の経験を、しっかりと自分のものに行っている。日々の生活から生まれた哲学を持っている。彼女の言葉の中には、苦しみを通り抜けてきた人間の持つ、深い思いやりと暖かさがあふれ、社会に対するはっきりした見解があるのだ。Mrs. Mount も同様に、強烈な個性の持ち主である。Mrs. Berry と同じように、夫に裏切られた女だが、美貌と金と暇とをもとに、常に遊びまわる。いわゆる“身持の悪い女”である。“Richard Feverel”において、彼女の占める役割は、ほんのわずかであるが、彼女の存在故に、Richard は悲劇的な結末へと急激に押し流されるのである。Meredith が“Enchantress”として描いた Mrs. Mount の中に、おそらく彼自身も意図しなかったような現代性がひそんでいる。彼女は、長い田園的な物語に、悲劇的な転機を与えるために設定された単なる“うらまれ役”にすぎぬ故に、Meredith は意識して、彼女の魔性を強調し、彼女の行動をいっさい“Enchantress”として裏づけているにもかかわらず、彼女の持つ不思議な魅力——人間性——を否定することはできない。

世間知らずの Richard を誘惑して、彼自身は勿論、彼の妻と子、Richard の一家のも

のを結局は、破滅に導いた女と Richard の関係に興味がわく。

He thought, too, she looked at him. He was not at the time inclined to be vain or he might have been sure she did. Once it struck him she nodded slightly.

というのが、Richard と Mrs. Mount に関する最初の描写である。このきわだった美人、男を恐れめ目を持った女、輝やくばかりに勇ましい感じの女……に Richard は、無意識のうちにひかれるのだ。

Richard が、おかれた客観的立場——父親の怒りをかった結婚、父との和解のためによぎなくされた妻との別居、ゆううつで退屈な日々——は、“Enchantress”を登場させるに、おあつらえ向きである。

Richmond における Mrs. Mount の party の席で、Richard は初めてこの美しい“Enchantress”と話しをする。彼女の言葉は、いつも男のように大胆で、はっきりしている。

“Bravo!” cried his Bellona, and her eye sent a lingering delirious sparkle across her brimming glass at him.

という表現の中に、我々はシャンデリアの輝く中に、黒い髪を豊かにたらしはなやかな女を見ることができる。彼女のまばゆいまなざしを通して、Richard は初めて Lucy とは別の世界に住む女のことを考え始めるのである。

Richard は世間知らずで、特に“女”については、殆んどかたわのような見方しかできないのだ。彼の世界に住む女性は、Lucy によって代表されていたのであるし、Lucy 自身、いわゆる非のうちどころのない貞女であったのだから、Mrs. Mount の持つ烈しい美しさ、強烈な性格は、彼にとってショックであったにちがいない。彼女はまた、単なる遊び女とちがひ、自信と誇りと、或る程度の教養を持っているのである。

Mrs. Mount did not come out much; but there was a deferential manner in the bearing of the men towards her, which those haughty creatures accord not save to clever women;

Adrian に、そこでさざめき笑いあっている女達の素性を聞かされ、また父に長年説き聞かされていた“女”と、目の前に居る“女”達との違いを見て、Richard の頭は混乱していく。かの Mr. Mount もまた、いわくつきの女であることを知って、彼は、

“I like the women who are brave enough not to be hypocrites. By heaven! if these women are bad, I like them better than a set of hypocritical creatures who are all show, and deceive you in the end.”

と叫ぶ。Mrs. Mount と話した後、彼は Ripton に向い。

“She talks capitally. She’s wonderfully clever. She’s very like a woman, only much nicer. I like her.”

という。苦勞した女、とりわけ結婚に失敗した女が、いつの間にかつちかかっていく、シンの強さ、たくましさは Richard の齒にこたえたのだ。ここで私は後に Meredith の妻となった Mary Nickolls と Meredith の出会いを思い出さずにはいられない。Richard は、持ち前の素直さで、ためらうことなく Mrs. Mount に近づいていき、彼女のまれなる気性と美しさ、才気にひかれていく。Mrs. Berry にいわせれば、“She's imitation lady, I'm sure she is!” “I say she don't look proper.” ということになるのだが、Mrs. Berry の言葉や、Mrs. Doria, Lady Blandish などの忠告にもかかわらず、彼は自分の心の空白を埋めてくれる対象として、同時にまた、不幸な立場にある Mrs. Mount を救済するという、もっともらしい名目の下に、彼女のもとを足しげく訪れるのである。

Mrs. Mount—Bella—は、最初は Richard を Lucy から離しておく“任務”故に、彼に近づいたのであるが、彼の信じやすい心、素直さの前では、彼女もまた素直にならざるを得ないのである。彼女は、この若い理想家に、自からさそわれていくのである。‘いわくつき’と烙印を押された女は、自己防衛のためにより一層“いわく”をつけるように自分を演出する。偏見を持って自分をみつめる男達に対しては“素直さ”などというもの、笑いの種にしかない。Richard に向って、

“I pretend to be no better than I am, and I know I'm no worse than many a women who holds her head high.”

という如く、Bella は、自分というものを、はっきりと意識している。

“Then the condition is that I am to seduce this young man?”

“My dear Bella! you strike your bird like a hawk. I don't say seduce. Hold him in—play with him. Amuse him,”

“I don't understand half-measures.”

“Women seldom do.”

How I hate you, Brayder!”

“I thank your Lordship.”

という、Mrs. Mount と Brayder の間の一連の会話が示す通り、彼女は Brayder の easy going な考え方をきびしく非難している。これによって我々は彼女が単に男から男へと快楽を追って流れる女ではないことを想像することができる。Bella は Brayder に頼まれて、Richard に近づくことになるのだ。

“D'you think if the world whips me I'll wince? D'you think I care for what they say or do? Let them kill me! they shall never get one cry out of me!”

このように話す Bella の態度を、すべて彼女の手練手管と見る必要もあるまい。彼女は不幸な人生を送って来たのであり、その数々の苦しみか、彼女を一筋縄ではいかぬ女に鍊えてしまったのだ。それ故、自分を苦しめようとする人間に対しては、おどろく程、強い性

格でぶつかるのだが、真に純粋なやさしさをもって接してくる男に対しては自分をどう扱ってよいのか、とまどってしまうのである。彼女は真面目に自分を気づかってくれる Richard の気持が、所詮、無駄であるとわかっていても、彼の純粋さにひかれていくのである。彼女の未来には希望があるわけでもなく、救いがあるわけでもない。また自分のおかれた立場から逃れようとするだけの勇気もない。ただ男に対し、社会に対し、精一杯自己を強くするだけである。

彼女の Richard に対する態度を Meredith は、度々皮肉たっぷりに、“struggling eyes were raised” とか、“A prolonged look followed the declaration” とか、“Those witch underlids were working bright” などという風に表現しているが、私はこういうたぐいの表現に非常な抵抗を感じるのだ。Bella を描く時、Meredith は、なぜもっと淡々とした客観的態度をとれなかったのであろうか。彼女を“Enchantress”とよんでしまうということは、読者の頭を一つの image に結びつけてしまい、それ以外の姿を想像することを困難にしてしまうのではないか。もし Meredith が Bella を単なる“悲劇の動機”に使ったのであったら、何故、もっと単純なタイプの“Enchantress”を作らなかったのだろう。彼女は非常に複雑な人間である。打てばひびくような頭の鋭さを持っている。彼女の吐く意見は、多くの場合、人間の裏面を突き、社会の悪をさらけ出している。

“When we're young we can be very easily deceived. If there is such a thing as love, we discover it after we have tossed about and roughed it. Then we find the man, or the woman, that suits us: and then it's too late! We can't have him.”

という彼女の言葉の中に Richard など想像もつかぬような、この世のままならぬ姿が現われている。この言葉は結婚によって裏切られた人間に共通する感情なのだろう。

“What am I to do? You tell me to be different. How can I? What am I to do? Why, man, I have blood: I can't become a stone. You say I am honest, and I will be. Then let me tell you that I have been used to luxuries, and I can't do without them. I might have married men—lots would have had me. But who marries one like me but a fool? and I could not marry a fool.”

などという言葉は、彼女の頭の鋭さ、気性の激しさをよく物語っている。人間的な欲望をさらけ出した最も人間らしい女、Bella という女を描くことによって、Meredith は当時における“超現代的”な女を作り上げたのである。彼は Bella の言葉を使って、当時の窒息せんばかりの状態にあった女性達に、目醒ましのバクダンを投げつけようとしたのかも知れない。

彼女は Lucy や Clare とはちがった、たくましさ、人間らしさを持っている。夫をひたすら待ちわび遂に子供を残して死んだ Lucy, Richard の指輪をだいて死んだ Clare, こ

の二人は、各々に女としての一種独特の強さ——忍耐——を持ってはいるが、共に人生に對して、非常に消極的である。いいかえれば、古風なのだ。Bella には積極性がある。彼女の中には自我のはっきりした新しいタイプの女がきらめいているのである。Richard と語る Bella は、或る時は勇ましく、ある時はメランコリックになり、ある時はあでやかになる。彼女の姿を描く時の Meredith の筆はすばらしい活気を持っている。彼は、彼女を、目まいを感じさせる程強烈な “Enchantress” に描くのであり、Richard との会話のやりとりの巧みさには、思わず息をのむものがある。しかし Meredith が、ここにおいて、彼女の行動を “Enchantress” として説明することなしに描いていたら、我々は Richard と Bella の心理状態を更に興味深く想像することができたかもしれない。

Meredith は Bella に誘惑された Richard を描いたのだが、読む度に、私には、誘惑されたのは Bella の方ではなかったかと思われてくる。Bella は殆んどどんな男でも誘惑することができたのであろうが、Richard のような飾り気のない純粋さを持った男に對しては、彼女自身の中にある正直さ、純粋さ故に、直の “Enchantress” にはなり得なかったのではないか。Bella は Richard の魂の美しさに、無意識のうちにひかれていき、現実の自分の立場と、彼に對する愛の間で苦しんだのであり、自分のどうしようもない苦しさを、シャンペンと共に Richard にぶつけたのだ。そして Richard にはそれをはねつけるだけの理性と勇気がなかったのだ。終始ヒステリックに自転する彼女と、口数少なく半ば同情的にぼんやりと彼女をみつめている Richard の態度とのコントラスト。

Richard と Bella の出会いは、ほんのゆきずりのものにすぎなかったけれど、その中に私はやはり男と女のどうすることもできぬ宿命的な差——感情のずれ——を見るように思う。
